

石垣島のソーロン・アンガマについての考察

草山 洋平

本論は、沖縄県の石垣島における旧盆にみられるアンガマ行事の変遷について考察したものである。現在この行事に登場する翁と媼の出現した経緯を中心として、アンガマ行事がどのようにして成立してきたかをとらえ、また、このアンガマ行事が島で生活する人々にとってどのような役割を果たしているかを考察した。

沖縄本島から南西へおよそ400キロの位置に八重山諸島がある。この地域は沖縄本島や近隣の諸島地域とはまた少し異なる伝統習慣をもっているといわれる。そのひとつとしてアンガマ行事がある。現在このアンガマ行事は、八重山諸島のなかでも行政的な中心とされている石垣島にある石垣市の四ヶ字で特に盛んに行なわれている。四ヶ字とは石垣市内の登野城、石垣、大川、新川の4つの字のことである。石垣島は琉球王府から派遣された頭職（首里大屋子）が置かれた土地でもあり、八重山諸島がその支配下におかれていた頃より近隣の島々の中核となっており、四ヶ字はその港町として栄えた土地であった。

ソーロン・アンガマとは旧暦の8月13日から15日までの、いわゆる旧盆に登場する芸能一団である。八重山では旧盆のことをソーロンと称するため、この旧盆の時期に登場するアンガマをそう呼ぶのである。彼らは後生くしよーと呼ばれる死後の世界からやってくるといわれ、旧盆の夜に所望された家々を巡り、芸能踊り

や頓智を効かせた問答をして、その家の者や祖先の霊を楽しませるのである。この問答はアンガマを率いているウシュマイと呼ばれる翁とンミーと呼ばれる媼と、アンガマを観に来た者との間で行なわれる。そのため、即興的な要素を含んでいるが、その受け答えはたいてい仏教に関連づけられたものである。

石垣島の儀礼や行事についての研究や報告は、アカマタ・クロマタやマユンガナシについてのもが多くなされている。これらは他界からやってくるという来訪神として、訪れた村や家での豊作や無病息災を祈るものとされている。これらに共通するものは石垣島の仮面儀礼であり、他界からの来訪するものであるという点である。本論文では、この石垣島において来訪するものの変遷を、アンガマ行事を焦点として考察することに独自性を見出そうとした。

第1章では、四ヶ字のアンガマがどのようなものであるかを概観し、それが八重山地域内の各地の年中行事で行なわれているアンガマと比べて、どのような特徴をもっているのかを提示した。四ヶ字のアンガマの人員構成は大きく3つに分けられる。ウシュマイ、ンミー、ファーマーの三役である。アンガマの総人数は年毎や行なう団体によりまちまちであるが15～20名くらいが平均とされ、多いときには30名近くなることもある。ウシュマイとンミーはそれぞれ1名、残りの者たちが

ファーマーを務める。ファーマーの人数によりアンガマの人員規模が変わるのである。ファーマーの役割は大きく2つに分けることができ、ひとつは芸能踊りをする役、もうひとつは地謡じかたともよばれる、踊りをする際の演奏つまり囃子はしをする役である。ファーマーの格好は、浴衣に腰帯を巻き、脚絆かばんをはいている。頭には花笠を目深に被り、さらに手拭いなどで頬かむりをして顔を隠している。サングラスをかけているファーマーたちを見ることがも少なくない。ウシュマイは翁の面、ンミーは媪おばあの面をそれぞれ被り、服装は浴衣ではなく麻で作った礼服の一種である。ウシュマイとンミーはファーマーを率いる役割を担っている。本論では、2003年に行なった調査をもとに四ヶ字のアンガマ行事がどのようなものであるか、その儀礼を概観することで、島の人々の祖先であるといわれる翁と媪の所作や、彼らとアンガマを見に来た人たちが問答をするといった特徴を提示した。一軒の家で行なわれる儀礼の所要時間は45分前後、翁と媪による霊前口上で、その家の祖先に対して家の者を褒め、出来事を報告する。口上を終えるとニブチャーと呼ばれる踊りを踊り、後はファーマーの踊りと、翁や媪とアンガマを見に来た者との問答が交互に繰り返される。最後は六調節と呼ばれる軽快な早弾きの曲にあわせての踊りがなされ、その家の者も混じって乱舞となって締めくくられる。この際、登野城のアンガマでは祝詞いわいことばが述べられる。

さらに、アンガマという名称の語源が何を意味するものであるかを考察し、石垣の方言のみでなく鳩間島や波照間島の親族語彙などを参考にして、「アン」は姉や母という女性を意味する語であるということ、「ガマ」は指小辞であり「～ちゃん」というような意味であるとした。また「ガマ」の語は分家した

家などにも用いると提示した。ここから、アンガマの語源から、女性と分家という二つのキーワードを見出した。

次に、所作や形態を比較するために、八重山地域の年中行事にみられるソーロン・アンガマ以外のアンガマを3種類あげた。家造りアンガマ、三十三回忌のアンガマ、節アンガマがそれである。家造りアンガマは、家を新築する際に親類縁者の女性が頭の上に家財道具をのせて輪踊りをするというもの、三十三回忌のアンガマは、三十三回忌の法事の最後に女性によって行なわれる輪踊りである。節アンガマは、八重山郡竹富町西表島宇祖内で行なわれている節祭りに登場する芸能一団である。節祭りは新年を迎える年越しを祝う祭りであるとされ、旧暦の八月から九月にかけての己亥つちのといの日から三日間行なわれる。節アンガマは、新年の日にあたる二日目の、世乞よーくいの日と呼ばれる日の満潮時に行なわれる世乞いの儀の後に登場する。その構成は、フダチミと呼ばれる黒麻衣をすっぽりかぶった者2名、太鼓で音頭とりをする音取り2名、アンガー（アンガマに同じ）十数名と、すべて女性によって構成されている。節アンガマは、フナムトゥヌウザと呼ばれる儀礼を行なう座に登場した後、フダチミと音取りを内側にして二重の円をつくって踊りをする。踊りは4曲の歌にあわせて行なわれ、節アンガマたちは円陣行進の形態で行なわれる。これにはソーロン・アンガマのような問答や台詞ではなく、歌と太鼓の拍子にあわせて静々と踊るのみである。

これらの四ヶ字のアンガマ以外のアンガマは輪踊りを基本としたものであり、仏教的要素はほとんど見られなかった。また女性によって行なわれていることもみてとれた。ここに、先の語源の箇所にて提示したキーワー

ドの女性という語が、その担い手を指しているとしてみるができる。

また、仏教行事のなかで行なわれるアングマ同士の比較として、四ヶ字のソーロン・アングマだけでなくその他の地域のソーロン・アングマもここで提示した。ここでは主に竹富島と波照間島のソーロン・アングマを例に出したが、その内容は、先にみた他の年中行事のアングマに似ており、輪踊りを基本とするものであった。そこから、四ヶ字で行なわれているアングマが他の地域のアングマと比べて、独特かつ特殊なアングマであるとした。

第1章の最後には、アングマ行事以外にも各家々では、旧盆の期間に祖先の霊を迎えていることから、各家々で行なわれている精霊（祖先の霊のこと）迎えから精霊送りまでの一連の流れを簡単にふれた。そこではムッチイプサイやシツツァ拾いという、子供が供え物を拾い歩く儀礼を提示して、これを後の章にて施餓鬼供養の一環であるとした。

第2章では、四ヶ字のアングマが仏教との関わりを有することから、琉球本土および八重山地域に仏教が伝来された経緯を考察した。この際、伝来された仏教を初伝といわれる宗派と、アングマでも使われている念仏歌に強く関わる浄土宗とにわけて考察した。石垣島への仏教の伝来として、八重山地域唯一の寺である桃林寺に着目して、仏教がどのようにして島の人々の生活に定着していったかを検討した。

まず、仏教が伝来する以前の信仰形態として、ニライ、オボツ、ウタキという三種の他界信仰を提示した。ニライ信仰については折口信夫の論を中心に既刊の研究報告について概観した。特に、このニライの観念が仏教伝来後には後生くしよーという死後の世界の観念に関することと、またニライの観念に付随するマレ

ビトという観念が、アングマを含める来訪するカミの観念であることを支柱として説明した。ここでは、ニライを海上沖にあるカミのいます聖地とするとともに、祖先の霊のような死者の魂のある場としても考えられ、相反する両義性をもつ他界観であるとした。

オボツは木や山そのものを神の居場所として信仰したものである。自然崇拝に基づいているとし、神は山の上空に常にいるものであると考え、その依代となる木や山を崇拝するものであるとした。

ウタキはこんもりとした森などを神の居場所として崇拝したものである。本論では、神が降りてくる依代として森を崇拝したものと、常にその神がいるという観念からの祠を信仰したもとして、これらを概観するのみとした。

次に、琉球本土と八重山地域への仏教が伝来した過程を考察した。ここでは政治的背景も含めた最初の仏教である臨済宗の伝来と、アングマが直接関わる仏教である浄土宗の念仏の伝来とに分けて考察した。琉球本土における臨済宗の伝来は1725年に成立した『中山世譜』の記載などから禪鑑による伝来とし、浄土宗は1713年に成立した『琉球國由来記』の記載などから袋中上人による伝来であるとみた。さらに、これらのものが八重山に定着するに至った過程として、八重山唯一の寺院である桃林寺に着目した。桃林寺は建立当時から臨済宗の寺院として石垣島におかれていた。その建立は薩摩藩からの提言によってなされたものである。つまり、琉球に仏教が伝来されてはいても、薩摩藩からの提言があるまでは八重山など諸島々にまで仏教を広めようという琉球王府の施策がなかったことを裏付けているとみることができた。

また、桃林寺は『八重山島大阿母由来記』

にある記述などから、航海安全、五穀豊饒、家内安全や無病息災を祈って、人々を正道に導くことを目的とされていたことを提示して、美崎御嶽というウタキと併せて航海安全を祈願する場として、仏教伝来以前のウタキの信仰と並立するかたちで存在し、庶民の生活に関わっていったと考察した。こうして桃林寺を媒介として、石垣島を含む八重山地域に仏教が定着していったと論じた。

また、八重山地域における念仏の伝来に関しては、当時琉球本土においてよくみられた^{ニンブチャー}念仏者と呼ばれる念仏聖のようなものがあるとした。念仏者は、京都をその発祥とする^{チョンダラー}京太郎と呼ばれる人形まわしをする雑芸人の系統と、浄土宗の念仏の要素をもっていた。京太郎とは元は演目の題名であったが、琉球に伝来した際に人形まわしをする者たちの名称と混同し、琉球本土では人形まわしのことを京太郎と呼んだ。この京太郎の人形まわしをとりいれた念仏聖たちは、首から「てら」と呼ばれる箱をつるして、その中で人形をまわして念仏の普及をしたのである。これが念仏者である。彼らの存在は琉球王府の公認であり、社会的身分は低い^{ニンブツダー}が念仏田と呼ばれる耕作地を与えられていた。念仏者は念仏田の作物で食を得て、普段は人形まわしのような念仏聖として仏の功德を説き、死者が出たときには僧侶に代わって死者に引導を渡し、葬送を執り行った。葬式の際、念仏者は鉦を鳴らしながら葬列に加わり、これが訃音告知の働きをただけでなく、鉦の音と念仏によって墓地にて、冥界への道を開き、また閉じる役割を担ったのである。当時の八重山地域では僧侶の人数が少なかったため、浄土宗の念仏を唱える念仏者が葬式に参加した。四ヶ字のアンガマは、アンガマを率いる翁と媪が無蔵念仏という、この念仏者の系統を引

いているといわれている念仏踊りをすることや、問答で仏教や死後の世界について教え説くということをするところから、四ヶ字のアンガマにみられる特殊性の基となるものを考察した。アンガマの基とであると考えられる念仏者が葬式に携わっていたことから。念仏者と葬式というアンガマを取り巻く2つの要素が認められた。

第3章では、アンガマの面や現在アンガマを執り行なっている青年会に携わった人からの話を基にアンガマの役割について考察した。1970年の『八重山毎日新聞』にある、アンガマが面をするのは、無縁仏が門前の供え物を拾うときに恥ずかしさから顔を隠すという記載や、アンガマの面のモチーフはターダヤーという家の老夫婦であり、祖先の霊と一緒に餓鬼を供養したことより始まったという、1980年の同じく『八重山毎日新聞』の記載があることからアンガマと餓鬼の関係がみえてきた。また、青年会の方の話では、ニンブチャーといわれる踊りの振り付けに、餓鬼を含む邪気を祓うという意味が込められているという。これらのことから、アンガマが覆面することには彼らを餓鬼とみる観念があり、それがウシュマイヤンミーといった翁と媪の出現により餓鬼祓い、または施餓鬼供養の役割に転化したことがみえた。ここにアンガマを取り巻くもうひとつの要素である施餓鬼供養がみられた。

このアンガマと念仏者、葬式、施餓鬼供養はそれぞれが関わりをもって結ばれる。念仏者はアンガマの基となったものであり、葬式に参加し死者を弔った。アンガマは旧盆に登場して祖先（死者）の霊とその家の者たちを楽しませる。同時にアンガマが盆にやってくる餓鬼であったともいわれ、また翁と媪の登場により施餓鬼供養をするという変化をみせ

た。これらのことから、仏教伝来以降の、念仏者からアンガマへ、葬式と施餓鬼供養を経ての変遷をみることができるのである。

最後にアンガマのもつ根幹の意味と役割についての考察をした。現在の登野城でも旧盆三日目のアンガマが終了した後にイタツキバラを行なっていること、また各家々で精霊送りをした後に、子供たちによるムッチイプサイ（餅拾い）またはシツツァ拾い（甘蔗拾い）といわれる行事が行なわれることから、施餓鬼供養の役割は後から付け加えられたと考えた。イタツキバラとは、いわゆる獅子舞の儀礼である。獅子をまわして餓鬼を元の世界に追い返すというものである。また、ムッチイプサイやシツツァ拾いというものは日本各地で行なわれていた盆籠によく似た行事である。子供を餓鬼に見立てた、まさに施餓鬼供養の行事である。そこで、共同体での施餓鬼供養をイタツキバラが、各家々の施餓鬼供養をムッチイプサイやシツツァ拾いが担っていると考察した。そこから考察を加え、アンガマの施餓鬼供養という役割は後から付加されたとした。

また、四ヶ字のアンガマにみられる問答も、その根幹自体は念仏者の口説き歌や念仏歌にあったと推測し、形態から察し、ウシュマイとンミーという翁と媪の登場からアンガマの問答が開始されたとした。ウシュマイとンミーの登場は19世紀末から20世紀初頭と推定され、現在の四ヶ字のアンガマが成立したのも当然この時期であると想定された。ここに四ヶ字のアンガマの始まりをみた。

さらにその根幹となるものは、以前から存在していたとして、付加されたものを取り除いていった結果、アンガマは他の地域と同様の念仏踊りであったことが推測された。そこには、折口信夫がマレビトの観念で論じたよ

うに死者の霊は常世において男女それぞれ1種類になると考えれば、アンガマの翁と媪が島の人々の祖先とされていることにひとつの回答を得ることができた。そして、そこに祖先崇拜の観念を垣間見ることができた。

結論として、アンガマの根幹をなす役割は祖先崇拜であったと考察した。四ヶ字のアンガマも元は共同体で行なわれた祖先崇拜を目的としたものであったと推測し、後生に渡り男女一对の霊なった祖先の霊から翁や媪の存在が登場したと考えられる。それが、後世になるにつれて、位牌の普及と共に、次第に各家々でも祖先の霊を独自に祀るようになり、共同体による祖先崇拜と各家々で行なう祖先崇拜が分化したと推測した。これは先のアンガマの語源にみられた二つのキーワードの分家からも伺える。従来は、アンの語彙に重点がおかれていたが、ガマに分家などの意味があるのであれば、分家した位牌のない家の者も含めた、共同体での祖先崇拜としてアンガマが行なわれたと考えられるからである。そして、次第に祖先崇拜は各家々で執り行われる方に色濃く残り、共同体での祖先崇拜は餓鬼の要素が付加されて、施餓鬼供養を含めたアンガマとして行なわれていったのではないかと論じた。